

愚かなる者よ！汝の名は悪人なり

悪人とは何ぞや。いうまでもなく善人の反対であって、自己の利益のため他人を犠牲にして平気でいるばかりか、中には一種の興味のためかとも思える奴さえある。ここでまず彼等の心理を解剖してみるが、よく悪人は太く短くという事を口にするが、悪事千里の譬え通り、長い期間は隠しおおせないという意味であろう。従って彼等は初めから承知してかかるので、もし知れたら百年目という覚悟である。ところが単に悪事というと、市井の無頼漢か強窃盗とうや殺人等のように思われがちだが、そうばかりではない。社会的地位のあるものが、実に危険至極と思われるような不正をする。終戦後、新聞雑誌を販わしているものに物質の隠匿、横流し、脱税、贈収賄等のいまわしい犯罪があまりにも多い事実である。この人がと思うような立派な名士等が、小菅行きとなるなどは不思議と思うくらいである。しからば、なぜ以上のような不正を行うかという、人の目を誤魔化し、巧妙にやれば知れずにすむという考えからである事は勿論である。ところが悪い事はどうしても知れずにはいない。これは見えざる霊界において神々が照覧ましましているからで、常に我々が口をすっぱくして言うところの「無信仰者は危険人物である」とはこの事で、相当偉い人でもこの肝心の事が認識出来ないのである。

ところが一度不正が暴露し犯罪者となった以上、社会的信用は失墜し、それを挽回するまでには相当長年月を要する事は勿論で、中には運悪く一生理も

れ木となる人さ え往々見受けるのである。考えてもみるがいい、ちょっとした不正利得のために及ぼす損失たるや、利得した何倍何十倍に上るかしかないのである。

明治時代有名なピストル強盗、清水定吉なるものが捕えられた時、彼はつづく述懐したそうである。その言葉によれば、「強盗ぐらい割の悪い商売はない。自分が今まで盗んだ金を日割にすると、一日四十五銭にしか当たらない」この事であるから、いくら物価の安かった明治時代でも、全く割に合わなかったに違いない。

以上のごとく信仰上から考えても打算的からいっても割に合わないばかりか、罪悪が暴露するまでの期間常に戦々競々として枕を高くして寝る事は出来ないのである から、悪事、不正をやる人間くらい愚かな者はない訳である。故に標題のごとく “愚かなるものよ、汝の名は悪人なり” というのである。

【昭和 24 年（1949）御発表】